Language Research Bulletin, 23, ICU, Tokyo

ドイツ文学のはじまり

―聖と俗を超えて―

[The Beginning of German Literature: Beyond the Holy and the Worldly]

柳井尚子
国際基督教大学

If we define German literature as a literature written in Germany by the Germans in German, German literature begins under the Saxon dynasty of the Kingdom of East Frank in the 11th century. But only a few manuscripts of literary works from this age are extant. However, many works written during the Staufen dynasty in the 12th century still exist. Therefore, practically speaking, German literature begins with this age. This paper analyzes the characteristics of the verse from the middle of the 12th century to the beginning of the 13th century. It concludes that verse in this period critically reflects historical and social issues, in particular those related to the literary activities and concerns of the nobility in the court cultures of the day.

1. はじめに

ドイツ文学とは、ドイツと呼ばれている土地で、ドイツ人によって、ドイツ語で書かれた文学であると定義するなら、ドイツ文学が本当の意味で始まるのは 12 世紀中頃だと言える。つまり歴史上ドイツの土地が初めてほぼ確定するのは、フランク王国のカール大帝の直系でないフランケン公コンラートⅠ世が東フランク王に選出されるが、ザクセン公ハインリヒが強大であったため、彼の東フランク王国からの独立の画策を阻止せざるを得ず、ハインリヒに王位を譲りザクセン王朝が開かれるころ、つまりこの王朝下（919-1024）の各ゲルマン部族が、ライン河をまたいでゲルマン諸部族を圧倒していたフランク族の桎梏から解放されるころであり、ドイツ人としての意識が初めて目覚めるのも、このザクセン王朝のゲルマン部族のゲルマン人によってであり、さらにラテン語からドイツ語への翻訳が現れるのもこの王朝からである。ただしこの時代及びその後のザリエル朝（1024-1125）の下でも古高ドイツ語（古い時代に南部高地地方で話されたドイツ語）で書かれた作品はごくわずかで、我々に多数伝承されているのはその後のシ

ュタウフェン朝（1138-1254）の中高ドイツ語で書かれた作品である。従ってタイトルに掲げた「ドイツ文学のはじまり」とは、ドイツ語による作品が盛んに書かれ始める 12 世紀半ば以降の時代を意味する。このドイツ文学が実質的に始まる時期に活躍した詩人たちの文学的営為に見られる特徴は何か、彼らの作品から考察したいと思う。

2. 宮廷社会と中世高地ドイツ語

中世初期以来、ラテン語は聖職者が公的資料を作成するためであると同時にアリストテレスなどの学術書を翻訳するために使われた。もっともギリシャ語の原典からではなく、アラビア語からの重訳であった。すなわち古代ローマ帝国が 395 年に東西に分裂し、西ローマ帝国はゲルマン人の脅威にさらされた結果、476 年に滅亡するが、東ローマ帝国（ビザンツ帝国）は、西ローマ帝国に対する宗主権を獲得して繁栄を続け、9, 10 世紀には帝都コンスタンティノープルは人口 40 万を擁する大都会へと発展し、古代ギリシャの学術はまずこのビザンツ帝国に伝わり、その後イスラム世界でアラビア語に翻訳され、そして 12 世紀の西欧に伝播し、ラテン語に翻訳されるのである。いわゆる 12 世紀ルネサンスの時代である。こうしてラテン語が学術の領域における主導的言語であり、同時に聖俗の貴族の公用語として機能したのに対して、詩作の言語としてはドイツ語が使われたのである。

ところでドイツ語を表す deutsch という単語は、西ヨーロッパの北西から古代ローマ帝国の国境へと南下したゲルマン人が「民衆の」という意味のラテン語 thodiscus によって自分たちのアイデンティテーを示したのに始まる。そしてザクセン朝の時代にこの原語の意味から独立して「ドイツ（語）の」という意味を獲得する。そして教養語であるラテン語でなく、口語として普及した民衆語であるドイツ語が詩作に使われ始める。だが民衆の間で広まったにもかかわらず、詩作に傾倒したのは民衆でも聖職者でもなく、大部分は公的生活でラテン語と接触のあった身分の高い世俗の貴族だった。ところが一方で、はやくも 11 世紀には都市が誕生していた。ケルンなどでは領主である司教からの都市自治体の独立運動が起こり、都市の同盟、商人の結束や職人ギルドが結成され、都市が中世社会で支配層に対して政治的に重要な意味をもつに至っていた。しかし都市民もこの時代に誕生した大学の一員となることができたが、一部遍歴学生を除く都市民もやはり文学活動には携わらなかった。支配権を担う使命と資格を自覚していた貴族が支配権を行使する場であった宮廷（Hof）を拠点に文学活動を展開した。Hof から隔てられた人々には詩作は無縁だったのである。貴族社会のヒエラルキーの頂点に立っていたのはドイツ王またはローマ王である皇帝で、彼の支配下で各地を転々と移動して宮廷が開かれた。王の下には土地を介して封建関係を結んだ諸侯が、諸侯の下には土地を所有しないミニステリアーレと呼ばれる不自由な下級の貴族がいた封建諸侯は彼らの権利を確保するために通常フェーデ（Fehde）とよばれる私闘を

行い、戦場では馬上の人となる騎士であった。中世文学が通称、宮廷騎士文学と呼ばれるのはそのためである。彼らはフェーデの合間を縫って詩作に興じたのである。なかには無論創作に専念する者もいた。そのような詩人は比較的下級の貴族で君主の庇護を受けて生活の糧を得ていた。学問の文野の知的刺激が、アラビア語からラテン語への翻訳から始まったのに対して、文学の勃興は、先行して成熟期に達していた中世フランス文学から中世ドイツ語への翻訳または翻案から始まった。

3. 聖か俗か

中世ドイツ文学は、叙事詩と抒情詩で卓越した詩人を輩出し、多数の作品が生まれた。叙事詩では作者不詳の『ニーベルンゲンの歌』、叙事詩作家としてはヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ、ハルトマン・フォン・アウエ、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの三大巨匠、叙事詩ではヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデを筆頭に数多くのミンネゼンガーが活躍した。叙事詩『パルチヴァール』、『イーヴェイン』、『エーレク』などの宮廷騎士叙事詩は、中世フランスの叙事詩人クレティアン・ドゥ・トロアが書いた作品と同名である。しかしドイツの詩人たちは単に翻訳したわけではない。彼らの詩作態度には、現実との接点が忘れ去られていない、時代の問題性と向き合う姿勢が見られる。ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデのように時代を映す作品を多数発表し、作品に史料的価値を見出すことのできる場合もある。ゲルマン時代の歴史を素材にした英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』も、中世の封建社会と重なる現実を指摘することが可能である。さまざまな素材を構成要素とする『パルチヴァール』や『トリスタン』にも、封建騎士社会の現実が主人公の行動に拘束的に作用している。抒情詩人にはドイツ王も名を連ねている。そもそも彼らがラテン語でなく、ドイツ語で詩作したこと自体が、当時の政治的宗教的現実に対する彼ら独自の意思表明と見ることができる。以下では、ドイツ文学の始まりにおいて、詩人たちが詩作において現実とどのように向き合っているのか、作品を鑑賞しながら、考察してみたい。

中世の世界には楕円の二つの中心に比することのできる二人の権力者がいたと言われている。俗界には古代ローマ皇帝の統治理念を継承した皇帝＝ドイツ王が、聖界にはローマ教会の首長である教皇がいた。この二人が中世ヨーロッパ世界の人々の頂点に君臨し、人々の生活と精神に強い影響力を及ぼした。そのように理解されるのは、社会の周辺部に生きていた人々の記録が皆無に近く、我々に資料として伝えられている大部分が権力者を巡る記録であり、その記録も権力志向的視点から記述されているためである。詩人たちもそのような支配層の一翼を担っていた人々に属するのであるから、彼らの作品にこの二人の権力者が繰り広げた世界を経験し、その経験に基づいた独自の思想が少なからず投影されていると考えられる。以下では中世の皇帝と教皇の歴史を俯瞰しながら、作品との関連を述べたい。まずハルト

マン・フォン・アウエの『グレゴーリウス』と『哀れなハインリヒ』を取り上げて、聖界、俗界に対する詩人の姿勢を読み取りたい。

まず『グレゴーリウス』であるが、この作品は教皇の即位を巡る問題をテーマにした叙事詩である。この教皇がいかなる人物であったかというと、彼は二回の近親相姦を犯し、その贖罪として 17 年間、孤島の岩上につながれていたのである。作者ハルトマン・フォン・アウエはこの近親相姦について作中でこう語っている、「よく言われているではありませんか。父の罪咎は決して子には及ばぬものと。われらが地獄に落ちようと、子供はこの恥ずべき業に、何の罪もないのですから。」(464 - 482) 第二の母子相姦についてもこの言葉から「知らずに」犯された罪は贖罪に値しないように受け取れるが、はたしてそうだろうか。ハルトマンはすでにプロローグにおいて、繰り返しこの物語を「恐るべき罪」の物語、「大いなる罪にまみれた男」の話と述べているのである。ハルトマンの言葉は、当時、近親相姦が社会的にかなり広く行き渡っていたことを物語るものであり、知らずに犯された近親相姦から生まれた子供は、公的には罪とすべきではないが、常識的にみて罪だ、とハルトマンは認識していると考えられる。このような男が教皇の座に就いたことが問題なのである。ハルトマンは、「いかに大きな罪であろうと、心から悔悟し贖罪に身を捧げるなら、許されぬ罪はない」とし、「ただ一ついましめるべきは、神の恩寵を疑うこと」と言っている。つまり主人公が教皇になれたのは、罪の償いが苦行によってなされ、それを「神」が許し給うたからなのである。真の神とはこのような存在であるべきだというのがハルトマンの主張である。またこの作品で教皇が騎士の生まれであることにも注目しなければならない。この騎士は、フランスのアキテーヌ公国の王位継承者として生まれ、妹との近親相姦の罪におののき、巡礼の途上で客死する。残された妹は公国の女支配者となるが、敵の攻撃を阻止するために夫を必要とし、そして知らずにわが子を再婚の相手に選んでしまう。この騎士が 17 年間わずかな岩清水だけで生き抜いてのちに、アキテーヌ公国の王ではなく、教皇に就くのである。教皇が俗世を超えているばかりか、現実の教皇を超越した存在となったのである。南フンランスを本拠地とするアキテーヌ公の宮廷は 12 世紀初頭フランス王を凌ぐ勢力を誇り、中世フランス文化の中心地だった。

ところでこの作品が書かれた時代の中世社会の教皇周辺で何が起こっていたのか。ハルトマンは作品の中でこう言っている、「そして神もまた、やがて彼の恐ろしい罪を忘れ、恵みをたれ給わんとしたちょうどその折、ローマ教皇が亡くなられた、と記し伝えられている。教皇が息を引き取られるや、ローマの人びとはそれぞれに、この高い位の後継者に、おのが縁者を送ろうと、互いに争い合うのだった。争いは争いを呼び、互いのねたみと野心に妨げられて、いったい、だれにこの聖座を委ねるべきか、もはや決めかねる仕儀とはなったのである。」(3137 – 3154) この言葉にグレゴーリウスと時の教皇との接点がある。ハルトマンは、ローマ教皇の後継者選びが世俗の権力闘争に劣らぬ醜悪さを露呈していることに厳しい目を向けているの

である。ハルトマンが言っている教皇とは言うまでもなく、イエスの使徒の長ペテロが殉教した地ローマに建てられた聖ペテロ大寺院を擁する歴としたローマ教会の最高責任者である。ちなみに多神教の古代ローマ帝国にあってキリスト教が、391年にテオドシウス帝によって国教となって以来、ローマ教会はキリスト教世界で揺るぎない地位を築き上げるが、ローマ帝国が東西に分裂してからは、東の帝都コンスタンティノープルに政治的にも宗教的にも優位性を奪われ、ローマ教会はギリシャ正教会に発展するコンスタンティノープル教会に首位性を譲らざるを得ない状態であった。しかもギリシャ正教会では皇帝が正教会の首長を選任するのが慣例であるのに対して、西ローマ帝国を継承したフランク王国から始まる中世の西ヨーロッパでは、教皇が上位で皇帝は下位か、あるいは逆か、つまり、教皇と皇帝の主従関係を巡って争っていたのである。

ハルトマン以前でだれが教皇に就いたか実例をあげると、800 年にカール大帝を皇帝に戴冠したレオ三世は、自堕落な生活のために教皇位を追われそうになったことがある。また 1077 年に皇帝ハインリヒ四世に「カノッサの屈辱」を被らせたグレゴーリウス七世は、俗名をイルブラントといい、イタリアのトスカーナ伯領の貧農に生まれるが、教会改革の中心的役割を果たしたクリュニー修道院の運動に共鳴し、教皇庁に就職して改革を推し進め、出世して教皇の選挙人である枢機卿となるのである。教皇ヴィクトル二世は皇帝ハインリヒ三世の遠縁であったし、その後の教皇ステファヌス十世はトスカーナ伯爵の実弟であり、ローマ教皇庁の実権を握った兄ゴットフレードによって教皇に登用されるという具合であった。ハルトマンに近い時代で有名な史実は、1131 年に時の皇帝ロタール三世に馬の鐙を支えさせて封建臣下の礼をとらせた教皇イノケンティウス二世がいる。

『グレゴーリウス』でハルトマンは、聖職者のなかから特別に宗教心が篤く、人格高潔にして学識豊富な高位聖職者が枢機卿になり、やがて教皇に選出されるという理想的な教皇像からはほど遠い現実の教皇への非難を込め、ローマ教会の標榜するキリスト教精神を超越する境地に宗教性の真実を見出したのである。

騎士が奇跡的に生きながらえて、ついに教皇になる『グレゴーリウス』に対して、『哀れなハインリヒ』は領主の命が奇跡的に助かる話である。主人公ハインリヒはドイツ南西部のシュヴァーベン地方の有徳で名望の高い領主である。彼をある日突然病魔が襲い、死を待つしかない。ただ処女の生き血によってだけ命は取り留められると医者に言われる。領地の一部を管理していた一家の娘が、生き血を提供すると名乗り出る。ハインリヒは強く断るが、娘の意志の強さに折れ、二人でイタリア南部のサレルノの名医を訪れ、執刀を頼む。そして医者が娘の体にメスをいれようとした瞬間に、ハインリヒの病は癒える。

領主とは土地を有する貴族であった。俗界の最高位には王領地を所有する国王（＝皇帝）、その臣下に比較的広大な土地を持つ公爵と、王領地に代官として配属され守護役を任された伯爵や辺境伯などが控えていた。ゲルマン民族時代以来の公爵とし

ては、フランケン公、ザクセン公、バイエルン公が強大だった。ハインリヒの領地シュヴァーベンは東フランク王国、現ドイツの西南部にあり、伝統的な公爵領ではなく、中世の王朝史との関連でシュヴァーベンが登場するのは、11 世紀初頭のザリエル朝（＝フランケン朝）のハインリヒ四世の頃からである。シュヴァーベンの歴史を皇帝との関連で説明しよう。シュヴァーベン地方は中世の最盛期をもたらしたシュタウフェン家の本拠地である。11 世紀後半、伯ではないが、貴族であったシュタウフェン家の創始者フリードリヒに 4 人の子供があり、その一人フリードリヒが皇帝ハインリヒ四世の忠臣であったので、皇帝は娘アグネスをフリードリヒに嫁がせた。ところがハインリヒ四世の姉婿がシュヴァーベン公ルドルフで、彼が対立王となってハインリヒに刃向う。ルドルフが死んだときハインリヒは、没収したシュヴァーベン公領を娘婿フリードリヒに与えた。このフリードリヒに二人の息子がいて、本家シュヴァーベン公を継いだのが長子フリードリヒ独眼公で、次子コンラートはフランケン王朝最後の皇帝ハインリヒ五世からフランケン公に任じられる。こうしてシュタウフェン家父子が西南ドイツを固め、ザリエル家を支えていた。ところがハインリヒ五世に嫡男がいなかったため、ハインリヒ五世はシュタウフェン家に王位を譲った。こうしてシュヴァーベン地方出身の新興のシュタウフェン家が中世の王権の桧舞台に登場する準備は整うのである。しかし、諸侯は新興のシュタウフェン家が勢力を増大するのを嫌い、ザクセン公ズップリンゲンベルク家のロタール三世をドイツ王に選出する。だがロタール三世にも嫡男がいなかったため、娘婿ハインリヒ傲慢公がドイツ王に名乗り出る。傲慢公はヴェルフェン家の当主で、ヴェルフェン家はハインリヒ四世の与党だった関係でバイエルン公領を、ロタール三世からザクセン公領を手に入れていた。南部のバイエルンと北部のザクセンを領有しては強大過ぎるとして、諸侯は傲慢公を退けて、シュタウフェン家に王位を与えた。そして 1136 年に独眼公の弟コンラートがコンラート三世としてドイツ王に就いた時が、シュタウフェン家の実際上の開基であった。

『哀れなハインリヒ』の主人公がシュヴァーベンの領主であることは、重要な意味をもっている。『哀れなハインリヒ』の著作年は、ハルトマンの作家活動の中間期で、処女作『エーレク』の 1180 年頃と、最後の作『イーヴェイン』の 1210 年か 1215 年との中間期と推測されている。時代的にはハルトマンはシュタウフェン家のその後の歩みとともに生きている。コンラート三世の次に王位につくのが、赤ひげの別称で有名なフリードリヒ・バルバロッサである。彼はコンラート三世の兄のフリードリヒ独眼公の長子で、独眼公はヴェルフェン家のハインリヒ傲慢公の妹ユーデットと結婚していた。傲慢公はヴェルフェン家の当主で、ザクセン公とバイエルン公を兼ね強大な領地を所有していたので、バルバロッサは従兄にあたる傲慢公の長子ハインリヒ獅子公の勢力に梃摺る。しかしバルバロッサが第三回十字軍を率い、小アジアのサフレ川で水浴中、不運にも溺死した 1190 年以降も、シュタウフェン家の優勢は続いた。シュタウフェン家がフランケン王朝の皇帝に連なるフランケン公を

継承していたからであろう。バルバロッサの後を継いだのは息子のハインリヒ六世であるし、その死後ハインリヒの弟フィリップはヴェルフェン家のオットー四世と争い一旦王位を奪われるが、オットー四世が教皇によって失脚させられた後王位についたフリードリヒ二世もハインリヒ六世の長子であり、シュタウフェン家であった。

シュヴァーベンの領主ハインリヒが幸福の絶頂から、不幸のどん底に落ち、純真な魂を持つ気娘に救われるという内容からは、シュタウフェン家による世俗支配の没落への警鐘、そして必衰を救うのは世俗世界に対立して存在する聖界ではなく、真の宗教性であることを読みとることができる。

4. 聖でもない、俗でもない

1170 年頃にオーストリアで生まれ、1230 年頃に死亡したとされるヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデに格言詩または政治詩と呼ばれている詩が 100 余編伝えられている。ヴァルターについては、1203 年 11 月 11 日（聖マルティンの祝日）にパッサウの司教ヴォルフガーから毛皮の代金を与えられたという記録以外何も残されていない。彼の政治的来歴も、彼が得た政治の情報源もまったく不明なのだが、これら一連の詩は同時代の教皇や聖職者をはじめ、ドイツ王であるフィリップ・フォン・シュヴァーベン、オットー四世、フリードリヒ二世、諸侯のオーストリア公やテューリンゲン方伯など時代を動かした高貴な支配者を名指しで歌っているものが多数あり、史料としての価値も十分にある。時代の真っただ中から生まれた詩を以下でいくつか紹介しよう。

私は眺めた自分のこの眼で
男女すべての秘め事までも、
それで人のなすこと言うこと
すべてを聞いたしまた見もしたのだ。
ローマでは　偽りするのを
二人の王を欺くのを聞いた。
そのため起こった　争いごとが
後にも先にも最大のものが、
僧侶らと俗の人らがその時に
二手に分かれていったのだ。
渦中の最大の禍、
肉体もまた魂もそこでは死した。
僧らは烈しく戦ったけれど
俗の人らが優勢となった。
彼らは剣を下におき

再び僧衣を身にまとい
望みのままに破門した
破門すべき人をそのままにして。
そこで寺院は損なわれたのだ。
遥か遠く草庵に
私は大きい嘆きを聞いた、
そこで隠者は涙して
悲しみを神に訴えていた
「ああ　教皇は若きに過ぎる　主よ　キリスト教徒を救い給え」
と。(L.9,16)

ああ　なんと信者らしく教皇が笑うよ
「こうしてやった」と彼がイタリア人たちに言う時に。
彼が語っていることは彼が思ってもならぬことだったろう。
彼は言う「私は二人のドイツ人に一つの冠を与えてやった
彼らが国を混乱せしめそして荒廃させるように。
その間にこそ　われらは箱を満たしておくのだ、
彼らを私の献金箱へ私は追い立ててやったのだ　かれらのものは
皆私のもの、
ドイツの銀はイタリアの私の箱へ入って来る。
高僧方よ　雛を食べそしてワインをお飲み下され
そしてドイツの俗人共を断食せしめ細らし召され。」　(L.34,4)

教皇自身が、彼の地で異端を殖やしているので
今の世に悪しきに向かわぬ心があるなら
それには精霊　神の愛が宿ると言うもの。
見られるがよい　僧らの行い　僧らの教えがどうであるかを。
以前は彼らの説教も彼らの行為も純潔だった、
しかし今　それらは共にうって変わり　逆な姿で共通している、
われらにはよき教えの範を垂れるべき
彼らが不正に行為するのを　不正に語るのを　われらは見　われらは
　聞くのだ。
それゆえにこそわれら知恵なき俗人たちの意気も当然阻喪するのだ、
かの勝れたる隠者はまたも嘆き大いに泣いておろう。(L.34, 24)

気高き陛下は
御名誉のため

方伯の過ちを許さるべきだ。
まことに彼は公然と
陛下の敵であったのだから。
しかるに卑怯な人々は密かに陰謀を企んでいた、
彼らはここで誓いを立てた　またかしこでも誓いを立てた
そして不実な悪行をもくろんでいた。
ローマから彼らの非難が起こって来たのだ。
窃盗は隠れたままでは済まされなくなった、
彼らは互いに盗みを始め
すべてが互いに裏切り合った。
見よ　盗人は盗人のものを盗み
威嚇が盗人共を従順にさせた。 (L. 105, 13)
（以上、村尾喜夫訳『ワルターの詩』より）

ヴァルターは俗界も聖界も腐敗が蔓延る現実に激しい非難を向け、俗界からも聖界からも逃避をひそかに望んでいる隠者（傍線）に我が身を重ねていると考えられる。ヴァルターの詩には、16 世紀に訪れる宗教改革と通底する思想を認めることができる。

ヴァルターやハルトマンより一世代も離れていない時代に叙事詩人ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハは『パルチヴァール』を完成させた。この作品はパルチヴァールという少年の生い立ちに始まり、その後宮廷の騎士となり、さらに成長の過程を経て、最後に聖杯（グラール）を得る物語を本筋とし、それに量的にもほぼ匹敵する完成者としての宮廷騎士ガーヴァーの愛と冒険の物語が共存するという構成をもつ 1 万 8000 行に及ぶ長大な叙事詩である。登場人物も多数で、内容も複雑で、表現も晦渋で、解明も苦難の技といえる。ただ詩人ヴォルフラムが当時の人々に与えた感銘を、少しのちの時代に書かれた作品から窺うことができる。このヴォルフラム像には 13 世紀初頭の時代の変化が影響を与えている。つまり聖と俗が分かちがたく結びつき渾然一体となって成熟の段階に達した中世騎士社会が内部で崩壊の兆しを呈しはじめるのである。その最大の原因は都市の発達である。都市が勢力を増し、貴族社会に切り込んできたのである。

すでにバルバロッサは 1152 年にドイツ王とイタリア王を兼ね、1155 年に皇帝となり、1169 年には 4 歳の息子ハインリヒをドイツ王に就け、シュタウフェン家によるドイツ王と皇帝の世襲権を広く知らしめ、彼の脳裏にドイツとイタリア全土支配への野望が駆け巡る。1184 年の聖霊降臨祭には二人の息子ハインリヒとフリードリヒに刀剣祭を盛大に挙行し、さらに 1186 年にハインリヒをナポリ・シチリア両王国のローゲル二世の娘コンスタンチェと結婚させる。バルバ

ロッサは 1154 年以来 6 回のイタリア遠征を敢行し、1155 年の皇帝戴冠に際して教皇ハドリアヌス四世の馬の鐙を支えるという屈辱にも耐え、帝国支配を盤石にしようとするが、この野望に立ちはだかったのが北イタリアで 1167 年にロンバルディア同盟へと結束した都市の勢力だった。ハドリアヌスの次の教皇アレクサンダー三世は、ロンバルディア都市同盟の覇者ミラノに後押しされて即位する。都市と教皇の結託が露呈するのである。こうして教皇と皇帝と都市が三つ巴の戦いに突入し、時代は混沌たる様相を呈し始める。さらにハインリヒ六世が 1197 年に死去した後にドイツ王となるフリードリヒ二世は、ハインリヒとコンスタンチェの子供で、彼は幼少時ドイツから離れた文化圏で育ち、統治時代もほとんどドイツへ行かずイタリアに留まって統治権を行使する。また 1229 年には十字軍を率い、時のスルタンだったアル＝カーミルと交戦せずにエルサレムに入城し、エルサレムの王冠を自分の手で戴くという具合で、国際感覚に溢れた人物なのである。十字軍の影響によるイスラム世界との接触を契機に、キリスト教を基盤とする世界観が変貌を遂げ、宗教の世俗化がますます顕著となり、諸宗教の共存と多元的な価値観が生まれてくる。『パルチヴァール』はこうした時代の変化に呼応した。人々が感動したのは、パルチヴァールが母および叔父アンフォルタスと会話を交わす場面であったのだろう。母は、騎士であるが故に夫が死亡したとの確信から、パルチヴァールを絶対に騎士にしたくなかった。未熟な少年には母の懊悩が認識できない。また傷を負った叔父である聖杯王アンフォルタスに、「どこが悪いのですか」という問い掛けをしない。俗界とか聖界とか言う前に、本来人間として何が必要なのかが問われているのである。ここから、ヴォルフラムについて人生の指導者的な存在としての「賢者」像が生み出された。それが明らかになるのが 13 世紀後半に成立した『ワルトブルクの歌合戦』なのである。

この作品は「君主賛歌」と「なぞなぞ」の二部から成っており、ヴォルフラムは前編でも後篇でも主要な人物として描かれている。パトロンである君主の恩恵で騎士文学が繁栄した中世の最盛期を回顧し、詩人たちの最大の称賛に値する最良の君主はだれかを歌で競う芝居仕立ての前編の「君主賛歌」では、ヴォルフラムは、ただ一人オーストリア公を称えるハインリヒ・フォン・オフタディンゲンに対抗してテューリンゲン方伯を最高の君主として称賛するヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデやラインマール・デア・アルテら 5 名のうちの一人であると同時に、歌合戦を裁く中立的な審判人であり、賢者（der wîse）と呼ばれている。また前編で敗北を喫したオフタディンゲンがテューリンゲン方伯妃から歌合戦の最終的な勝敗を決する猶予が与えられ、ハンガリアから連れてくるクリングゾールと決戦を繰り広げる後編の「なぞなぞ」では、本来の歌合戦には戻ることはなく、クリングゾールが掛けるキリスト教の教義についての質問を, leie(無学者、門外漢、素人などの意)と罵倒されるヴォルフラ

ムが次々に解き明かすことになる。ここには形骸化し陳腐化したキリスト教の教義とは対照的に人道主義的な精神の重要性が示唆されているのである。

5. 愛の観念

中高ドイツ語に「minne」という単語がある。これは何かを「想い」、それが深まっていく精神状態を意味し、それが「愛」と呼ばれた。中世では特に抒情詩人がこの愛をテーマにした。愛の対象と、愛の本質について彼らはいわゆるミンネザング（恋愛抒情詩）を通じて徹底的に考え抜いた。抒情詩人には女性はいない、すべて男性であり、彼らが想う対象は、「神」か「女性」であった。女性への愛ゆえに「神」が忘れ去られないのであって、女性が男性の行動に対して決定権を獲得した。この想いを十字軍との関連でハルトマン・フォン・アウエは次のように歌っている。

Ⅰ　一族の皆さん、皆さんのお許しを得て、これから旅に出ます。故郷の人々と国土がどうかご無事でありますように。旅の子細をお尋ねになるにはおよびません。私のほうからご説明いたします。私は愛の女神にとらえられ、服従の誓いを立てた上で自由の身にしてもらったのです。さてこのたび女神から、不興を被りたくないなら出陣するようにとの命令を受けました。命令は絶対服従、どうしても行かざるを得ないのです。どうして私の誠実な誓いを破ることなどできましょうか。

Ⅱ　愛のためなら何でもすると吹聴する男は大勢います。実行はどこにあるのでしょう。口でいろいろ言うのはよく聞きますが。でもこんな連中の誰かに、愛の女神がこう命令なさるのを見たいものです。私が女神に仕えるのと同じ仕方で女神に仕えるようにと。もし誰かが愛のために異郷の地に行かずにはいられないというのなら、これこそ真に愛しているというものです。さあこの通り私は愛に率いられて母国をはなれ海の彼方に赴きます。たとえサラディン殿とその全軍がいたとしても、私がフランケンの国から一歩でも足を踏み出すのは、彼らのせいではなく、ひとえに愛のためなのです。（MF 218,5 の第 1 節と第 2 節）

「ミンネ」の対象が女性である場合は、その本質は精神性にあるのか、官能性にあるのかが問題となった。精神的な愛は、「Hohe Minne」（高き愛）、官能的な愛は「Niedere Minne」（低き愛）と表現された。その際、女性の身分が問われた。精神的な愛の場合は、愛の対象となる女性は高貴な女性であり、官能的な愛の場合は、身分の低い少女であった。ラインマール・デア・アルテの以下の詩の三節目では、ミンネは「女性」と同一視され、称賛の対象が女性そのもの

となり、愛は苦悩と男性の人格陶冶に近づいた。

Ⅲ　幸いなるかな、女、なんという清い言葉。女という言葉を知り、口に出すことの何と快いことか。やさしいあなたが、真のやさしさを心がけるときには、これほどに褒め讃えるべきことはない。あなたの賛美を言葉で尽くし得る者はいない。あなたの真心を受ける男は至福であり、喜び勇んで生きることができる。あなたは世のすべての人々に喜びの気持ちを与える。私にもほんの少しの喜びを分けてください。

Ⅳ　二つのことをよくよく考えてみると、心は思い悩んで、どちらにも決めかねる。あの方の気持ちを私の意志でおとしめることを望むべきか、それともあの至福のお方が、私だけでなくすべての男の手が届かないままに、その気高さが増すことを望むべきか。この二つのどちらも私には辛い。あの方の名誉の傷つくことを私は決して喜びはしない。あの方が私のものにならなければ、それをいつまでも嘆くのである。
（MF 165,10 の第 3 節と第 4 節）

師匠格であったラインマールとヴィーンの宮廷でヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデはミンネ論争を繰り広げ、少女への官能的で純真な愛を理想に掲げた。その代表作を紹介しよう。

Ⅰ　「野原の菩提樹の木陰、あたしたち二人のベットがあったところでは、皆さん、花や草がきれいに折れているのが見えるでしょ。森の前の谷間では、タンダラデイ、美しくナイティンゲールが鳴いてたの。

Ⅱ　あたしは水辺に行きました。あたしの彼氏はもう来てました。そこであたしは、奥方さまって迎えられたの。だからこの先いつまでも幸せよ。キスしてくれたかって。ええ、千回も。タンダラデイ、ほら、あたしの唇はこんなに紅いの。

Ⅲ　そのとき彼はこんなにりっぱに花で寝床を作ってました。だれかがこの小道を通りかかったら、それを見て心から笑うでしょうよ。ばらの花のそばに、タンダラデイ、あたしの頭のあったところがわかるでしょ。

Ⅳ　あの人があたしの横に寝ていたことを、だれかに知られたら、ああ、恥ずかしい。彼があたしと何をしたか、けっしてだれにも知られませんように。彼とあたしと、そして一羽の小鳥のほかには。タンダラデイ、小鳥はきっと、秘密を守ってくれるでしょ。」　（L.39,11）

そしてヴァルターは「高き愛」と「低き愛」を超越して愛の本質を、身分の関係なく「二人の心の喜び」にあると歌っている。

Ⅰ Saget mir ieman, waz ist minne?
weiz ich des ein teil, sô west ich es gerne mê.
der sich baz denne ich versinne,
der berihte mich, durch waz sie tuot sô wê.
Minne ist minne, tuot sie wol ;
tuot sie wê, sô heizet sie niht rehte minne.
sus enweiz ich, wie sie denne heizen sol.

Ⅱ Ob ich rehte râten kunne,
waz die minne sî, sô sprechet denne jâ.
minne ist zweier herzen wunne :
teilent sie gelîche, sô ist die minne dâ.
Sol sie aber ungeteilet sîn,
sône kan sie ein herze aleine niht enthalden.
owê, woltestû, mir helfen, vrouwe mîn ! (L.69,1 の第 1 節と第 2 節）

（どなたか言ってくれますか、愛とは何か。私もそれを少しは知っておりますが、もっと多くを知りたいのです。私よりもよく考えることのできる人がいたら、どうか私に教えてください。なぜ愛はこれほどにつらいのか。愛は心地よいからこそ愛なのです。つらいものなら愛と呼ぶのにふさわしくありません。それなら一体何と呼べばよいのでしょうか、わたしにはわかりません。

もし私が愛とは何かを言い当てたら、皆さん、そうだと言ってください。愛とは二人の心の喜びです。二つの心が同じように分けあうときにあるのです。もし愛が分かちあわれていないのなら、ただ一つの心だけでは愛を担うことはできません。おお、私に力を貸してくださいませんか、わが恋人よ。）（以上、ドイツ中世恋愛抒情詩選集『ミンネザング』より）

1150 年頃の最も初期のデア・フォン・キューレンベルクからそれ以降 1300 年前後に至るまでのミンネゼンガーにはドイツ王、王侯貴族や下級貴族が含まれ、彼らは様々な愛を歌ったが、中核的なテーマは、神の人間への愛、人間の神や隣人への愛ではなく、男女間の愛であった。これほどまでに女性をクロー

ズアップし、女性を賛美し、愛が詩人たちの想念の対象となったのは、中世社会の現実が背景に存在するのである。中世社会、それは貴族を主体とする社会であり、それを根底で継続的に支えてきたのは婚姻によって男子の後継ぎを作るという制度で、それは相続確保や権力維持を目的とする政略的な結婚であった。34 歳のバルバロッサがブルグントの 13 歳のベアトリクスと結婚したのは、ブルグントがイタリアへの遠征を遂行する近道だったからであり、息子ハインリヒ六世をシチリア王国の継承者コンスタンチェと結婚させたのは、イタリア南部まで支配権を拡張する野望からであり、ハインリヒ六世の弟フィリップがビザンツ帝国の王女イレーネと結婚したのも、十字軍を成功裡に進めるためであり、フリードリヒ二世が、アラゴン王の姫、エルサレム王の姫、イギリス王の姫と次々と結婚したのも、政略のために他ならなかった。しかもこの結婚の合法性のもとで女性の価値は男性より低く、伝統的に軽蔑されてきたのである。現実社会の男女関係の逆転現象が文学で起こり、愛の領域で女性が男性を押しのけて支配者の地位についたのである。

男性にたいする女性の優位、つまり騎士の生き方が女性によって決定されるという理念は抒情詩ばかりでなく、叙事詩にも見られる。ハルトマン・フォン・アウエの『エーレク』では、妻エニーテの愛の確信を得るのは、エーレク自身が騎士として自信を得たときであり、『イーヴェイン』において一年の期限つきで妻ラウディーネのもとを去ったイーヴェインが、妻と邂逅できるのもイーヴェインが騎士として成長を遂げたときなのである。また愛を死にまで高めたのは『ニーベルンゲンの歌』のクリームヒルトである。夫ジークフリートを実兄であるブルグント王グンターの家臣ハゲネに暗殺されたクリームヒルトが復讐を胸に誓ったとき、夫に対する愛は死と同一のものとなった。ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの『トリスタン』の場合も、トリスタンとイゾルデの愛は、トリスタンの叔父マルケ王を裏切る不倫の関係であり、封建騎士社会の道徳に真っ向から対立する恋愛関係なのである。

6. 結び

12 世紀半ば以降ドイツ語による芸術のための文学作品が世俗の支配層である騎士階級の貴族によって続々と書かれるようになる。彼らの創作態度に共通する特徴として、時代の貴族社会に対する批判的な観察力をあげることができる。無論、彼らの生活基盤であった宮廷で伝統的に守られていた道徳を揶揄したり、軽視したと言うわけでは決してないが、作品には時代の反映を窺うことができる。彼らを詩作の衝動へ駆り立てたのは、『トリスタン』の冒頭でゴットフリート・フォン・シュトラースブルクが述べている「この作は高貴なる心情の愛を物語るものであり、人々の特性をたかめるものである」という言葉がその理由を最も端的に物語っているであろう。中世の聖俗の錯綜する宮廷社会の現実か

ら涵養された考え抜く能力としての知性と感受性の豊かさが宮廷的教養として対立的に存在した、つまり文学的営為を現実の対型と捉える貴族たちの意識によって、宮廷文化は深みと躍動性を獲得したと言えるだろう。

参考文献

Althoff, G. & Goetz, H.-W. & Schubert, E.(1998). *Menschen im Schatten der Kathedrale - Neuigkeiten aus dem Mittelalter*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft: Darmstadt.

Brackert, H.(1983). *Minnesang. Mittelhochdeutsche Texte mit Übertragungen und Anmerkungen*. Fischer Taschenbuch: Frankfurt a. M..

Cormeau, Ch.(1996). *Walther von der Vogelweide. Leich, Lieder, Sangsprüche. 14. Auflage*. De Gruyter / Berlin: New York.

Fischer, W.(1935). *Der Wartburgkrieg*. Verlag Freude der Wartburg e. V.: Eisenach.

Hoffmann, W.(1987). *Das Nibelungenlied*. Verlag Moritz Diesterweg: Frankfurt am Main.

Maurer, F.(1972). *Walther von der Vogelweide. Die Lieder. Mittelhochdeutsch und in neuhochdeutscher Prosa. Mit einer Einführung in die Liedkunst Walthers.* : München.

Moser, H & Tervooren, H.(1988). *Des Minnesangs Frühling. 38. Auflage*. Hirzel : Stuttgart.

Rompelman, T. A(1939). *Der Wartburgkrieg*. : Paris.

Schweikle, G.(1986). *Reinmar. Lieder. Nach der Weingartner Lierderhandschrift (B). Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch*. Reclam: Stuttgart.

Schweikle, G.(1998). *Walther von der Vogelweide. Werke. Band 2 : Liedlyrik. Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch*. Reclam: Stuttgart.

Simrock, K.(1858). *Der Wartburgkrieg*. : Stuttgart.

Wachinger, B.(1973). *Sängerkrieg. Untersuchungen zur Spruchdichtung des 13. Jahrhunderts*.: München.

石川敬三(1976)『トリスタンとイゾルデ』郁文堂.

加倉井粛之, 伊東泰治, 馬場勝弥, 小栗友一(1974)『パルチヴァール』郁文堂.

村尾喜夫(1969)『ワルターの詩』三修社.

平尾浩三, 中島悠爾, 相良守峯, リンケ珠子(1982)『ハルトマン作品集』郁文堂.

岸谷敞子, 柳井尚子(1987)『ワルトブルクの歌合戦』大学書林.

ヴェルナー・ホフマン, 岸谷敞子, 柳井尚子, 石井道子(2000)『ドイツ中世恋愛抒情詩撰集　―　ミンネザング』大学書林.

柳井尚子訳『騎士の時代』(1992)（フリードリヒ・フォン・ラウマー著）法政大学出版.

柳井尚子訳『中世人と権力』(2004) (ゲルト・アルトホフ著) 八坂書房.